

## 第5回宮代町総合計画審議会議事録

### 1 開催日時

令和元年10月24日（木）午後7時00分～午後9時00分

### 2 開催場所

役場2階202会議室

### 3 出席者

（委員）

折原正英委員、吉澤久美子委員、並木誠委員、秋山高善委員、佐々木敦子委員、  
佐々木誠委員（会長）、保科寧子委員、高津絵里委員、八木橋孝雄委員、松山仁委員、  
難波悠委員、鈴木和子委員

（欠席）

小林俊介委員

（事務局）

栗原企画財政課長、伊東副課長、榎本主幹、小川主査、立見主任

（コンサル）

牧野氏、菊地氏

### 4 次第

- 1 開会
- 2 あるべき未来の宮代町の検討
- 3 第5次総合計画の将来都市像について
- 4 その他
- 5 閉会

## 5 議事（要旨）

### （1）開会

### （2）あるべき未来の宮代町の検討

あるべき未来の宮代町の検討について、事務局より資料1及び資料2に基づき説明を行った。委員からは以下のような意見・提言があった。

佐々木会長 10年後の素晴らしい未来を実現するための方針を固めていくため、資料1にある4つのテーマについて意見交換をしたい。①宮代町のブランド力をどうやって高めるかについていかがか。

保科委員 色々提案が出ているかと思うが、これらの優先順位はこの場で決めるのか。それともある程度前提となっている方針はあるのか。

事務局 当然優先順位を決めてどこに力を入れていくか決めていく必要があり、その点についても皆さんに意見を伺っていきたいと考えているが、まずはたくさんアイデアをいただきたい段階である。

折原委員 ここで言うブランド力とはどう捉えればいいのか。宮代ならではのということであれば、日本工業大学、東武動物公園などとコラボするような取り組みができれば、宮代ならではのと言えるのではないか。

吉澤委員 ブランド力、宮代にしかないものはなにかと考えると、進修館等の建築物は宮代にしかないものである。これまでそういった視点では見ていなかったが、改めて考えてみるとこれらは自分にとってノスタルジックな気分にかけてくれる存在かなと思う。商業の活性化も含め、進修館等を際立たせるようなまちづくりの方向性、前回話題にあがった古民家カフェのようなものとも絡めてまちづくりを考えていくことはできないか。本当の意味で宮代にしかないものという、やはり進修館、日工大、東武動物公園などになるのではないか。

八木橋委員 宮代のブランドとは何なのか。そこがはっきりしないとブランド力は出てこないのではないか。ブランドと言っても町外に対してのブランドと町内に向けてのブランドがある。確かに進修館、東武動物公園等はあるが、外に発信したいのか、どうしたいのか。

佐々木会長 おそらく両方ではないか。町民にとって誇れるものは何か、町外の人に自慢して共感してもらえるか、両面かと思う。

秋山委員 東武動物公園、日工大等が宮代町の誇りというのはわかるが、今後人口を増やしていこうといった時に、それがあるから住んでみようということにはならないのではないか。町内の話と外向けに何を発信していくのかについては分けて考えた方がよい。学生などにも宮代町の認知度は低く、県内に住んでいても宮代町を知らない学生はいる。日工大、東武動物公園等の町の資源と町自体の結びつきを強くしていかないと、外に発信するメ

ッセージとしては弱い。

鈴木委員 「これぞ宮代」に近いかもしれないが、自然が多い、人が温かいなども宮代町の良さでありブランドだと思う。また、先日の台風による被害が少なかったことを振り返ると、災害の少ない安心して住める町であるということに改めて思った。

吉澤委員 娘に宮代のいいところを聞いたところ、「治安」という答えだった。単に犯罪が少ないというだけでなく、非行や変な道に進む子も少ないし、人のつながりが大事にされている町だということに気づかされた。

高津委員 町内の店にのぼりがあると買ってみようとなる。店自体が推している食べ物や商品などを、再度力を入れて町でおすすめしていくのはどうか。

吉澤委員 以前商工会でみやしろ餃子に力を入れていたと記憶しているが。

並木委員 宮代の食材を使い、町内の店舗が作るみやしろ餃子を商工会でPRしていたが、なかなか継続が難しい。

八木橋委員 とにかく宮代の名前を売るというのも一つの方策。商品でも何でも名前に宮代を付けて、宮代ってどこにあるの？と思わせる。そこから次に、宮代と付いていれば食べ物も安心、宮代なら安心して住めるなどという風につながっていく。

高津委員 表記の統一も大事。ひらがなでみやしろなのか漢字で宮代なのか。その違いによってSNSでの拡散の仕方も違ってくる。

保科委員 今後はハードよりもソフト重視か。目指す方向性としては、魅力的になってたくさんの人に住んでもらうということだと思う。子育て支援や高齢者の働く場の確保等について、制度面も含めて宮代スタイルを構築し、そういった情報を発信していくことで子育て世代や親と同居したい方などが集まってくるのではないか。お金をかけないで制度面、ソフト面を充実させていくのはどうか。

佐々木会長 いかにか他との差別化を図っていくかということ。そういう意味では②の「これぞ宮代」につながっていくことかと思う。

松山委員 宮代町はいい意味でも悪い意味でも40年前と変わっていない。それは長所にも短所にもなることだと思うが、東京から40キロ圏内でこんな田舎は他にない。東京に一番近い田舎、これが一つの売りだと思う。住民は安心安全で皆満足している。スローライフ宮代、近くて過ごしやすい町である。

佐々木会長 それでは②の新たな「これぞ宮代」の種になりそうなものについて、意見があれば。

吉澤委員 40年も変わっていないのなら逆にそれを売りとして活かしていくべきかもしれない。いっそ「田舎」をもっとアピールすべきではないか。これまで「コンパクトシティ」など都会的なイメージに寄せていたようだが、「田舎」をいいイメージとして売りにできないか。

佐々木会長 コンパクトシティに着目すると、都市的なものを目指しているようなイ

メージを感じる。都心から一番近い「田舎」というところに軸足を置き、ブランド化していくのは他にはない良いところかもしれない。

秋山委員 「田舎」という言葉は人それぞれ捉え方が違う。もう少し具体的な表現をしないと伝わりにくいのではないか。

折原委員 やはり「都心に一番に近い田舎」なのだと思う。山の中の過疎化、少子高齢化が進んだ町も田舎。田舎にも色々なジャンルがある。

八木橋委員 これまで第2次と第3次計画では「文化都市」第4次は「コンパクトシティ」とうたっており、あくまで都市を目指していたのではなかったか。新たなこれぞ宮代ということだが、今あるものを見直していけばいいものは出てくると思う。住民が帰ってきてほっとする、安心する、そういう場所がそれぞれ人によっては「田舎」なのではないか。第3次計画の策定委員をやっていたが、当時から何も変わっていない。無理に新たなものを見出す、作り出すよりも、今あるものを見直していいところを伸ばしていくべきではないか。

佐々木会長 既にあるものを再発見する事が新しいということかと思う。ただ、町内の人はわかっている町の良いところも、外の人にはなかなかわからない。それを外向きに発信していく場合に、もう少し具体的なキーワードやイメージが出てくると②のテーマへの提言につながりそうである。

難波委員 ブランド力が何を意味するのかわかみきれていない部分はあるが、例えば町の課題が明確にあり、それを他とは全く違う宮代独自の方法で解決していくことができれば外の人にも伝わりやすいのではないか。また、田舎のイメージは環境がいい、静か、不便など人それぞれ持っているものが違う。若い世代に住んでもらうためのアピールをしていくなら、緑が豊かで環境がいい、でも不便じゃなくて都会っぽくおしゃれな生活、豊かな生活も送れるということを伝えていく必要がある。

吉澤委員 便利だけど田舎にきた感じがする、というようなことか。

折原委員 今回の台風の災害で、田園調布、武蔵小杉などはずいぶんイメージが変わってしまった。ブランド力、イメージを作るのはやはり難しい。

佐々木会長 ブランドを作るプロセスをこれから10年かけてやっていこう、ということでも良いのかもしれない。

それでは「③民間企業や大学がこんなことをしたら町が良くなる」について何か意見があれば。

保科委員 町には空き家もたくさんあり、40年間変わっていない良さもあるということである。例えば横浜にあるラーメン博物館はわざわざ昔を再現しているが、40年間変わっていないのであれば、昭和の懐かしい建物など、あえて新しくせず直して残し、店舗に活用していくなどできれば楽しいのではないか。ノスタルジックな雰囲気そのまま残し、田舎とおしゃれな暮らしの融合ができないか。

佐々木会長 必ずしも箱物の博物館ではなく、地域そのものが博物館という捉え方で

既にあるものをエコミュージアムとして発信したり、拠点を設けたりなど、やり方は色々考えられる。

保科委員 ある自治体で昭和の乙女として年配の女性が町の案内をしている事例を聞いたことがある。市民に協力していただくとすれば、ボランティアかあるいは多少給料を出しても良いのではないか。

佐々木会長 その場合、給料は誰が出すか。

保科委員 実際の案内はシルバー人材などがいいのではないか。給料については最初は行政で負担していただければいいと思うが、行政以外となると難しいかもしれない。

高津委員 NPO など興味がある方がいればお願いできないか。近所で趣味の家として高齢者の方々が集まれる場をやっている人がいる。子育て関係なら子育て支援センター、障害関係なら放課後等デイを作りたいなど、やってみたいというような方もいるのではないか。行政にはそれらの活動を立ち上げる際のアドバイザーの役割をお願いしたい。ただ、そういった場が点在していると不便に感じる。例えば新しい村に集めるなど、拠点となる場づくりは必要になるのではないか。駅前開発についても、単に駅前に商業施設を作るだけでは動物公園と駅の間のみは素通りされるだけになってしまう。周辺環境をどう活用するか的位置づけやルート設定も重要になると思う

保科委員 お金が回る仕組みとして、運転手が有償ボランティア的な位置づけの相乗りタクシーのようなシステムができないか。利用料は通常のタクシーの3分の1くらいに設定し、点在している施設や商店を巡回する。

八木橋委員 どこかに集中させて何かを作るのか、現状のまま今あるものを活用して営業が成り立つように持っていくのか。

高津委員 とにかく駐車場がないと子連れの方などは利用しにくい。

八木橋委員 先ほども話題にあがったが、古い空き家がたくさんある。例えば不動産屋と連携して商工会の中に窓口を作るなどして、空き家を移動支援の拠点にするような仕組みはどうか。

保科委員 空き家をターミナル化して移動の拠点にするとともに、お店として物販の機能を付けることも考えられる。

八木橋委員 単なる住居としてではなく、こんな商売ができます、というような情報をあわせて紹介して手を挙げる人を見つけていく方法もある。

佐々木会長 ワークショップでは高齢化に伴う免許返納など、移動や交通に関連する話題が多くあげられていた。商業についても、集中させるのか分散したまま活かしていくのか、ともに重要なテーマかと思う。

これまで町は市民の力に頼る部分も大きかったと思われるが、今後のテーマとして、③の民間企業や大学の役割を考えていくことは新たな切り口かと思うがいかがか。

鈴木委員 これまでボランティアは、リタイア後の方や自宅にいる方が比較的携わ

りやすいというイメージだったが、これからは民間企業で働いている方にも、週1回でもボランティアに関わって長く続けてもらいたい。今度のオリンピックの聖火リレーをきっかけとするなど、若い方や働いている方のボランティアへの関わりを広げていくべきではないか。また、高齢化が進展する中で、元気な高齢者の働く場、コミュニティビジネスなど、地域に関わる場面が増えればいいと思う。

佐々木委員 小学校でプログラミングの授業が開始されるが、大学生にボランティアで関わってもらうことはできないか。

佐々木会長 プログラミングの件は既に取り組んでおり、まず希望する高齢者に大学生がプログラミングについて教え、学んだ高齢者が学校で生徒に教える仕組みとなっている。

吉澤委員 コンテストのような形で、まちづくりに関わる建築関係の設計を日工大生にお願いするようなことは可能か。

佐々木会長 杉戸町庁舎の喫煙所の設計や幸手市のアート散歩に関連して空き店舗のリノベーション、宮代町でもリトルヒーターグラスやアンカルクカフェなどのリノベーションについてお手伝いしている実績はある。

八木橋委員 単位取得の要件にならないボランティアだと学生は大変だと思う。

折原委員 ボランティアが単位になる大学もあると思うが。

佐々木会長 そういう大学もあるが、日工大はものづくりに結び付けようという方向性がある。

難波委員 イギリスではBIDといって、商工会のような組織が地域で商売をやっている人皆から会費を集めてまちづくりを進める活動をしている。空き店舗を大学と一緒に借り上げて、大学生向けのチャレンジ店舗や学生のワークショップ等の活動の場として活用している。学生のうちから商業的な部分に関わり、町と交流する場面ができると、結果として卒業後の定着に繋がるようだ。そういった場を町と大学と一緒に作り、学生は無料で使えるようにして、一定期間の活動に単位を与えるなどすれば学生も積極的に取り組むのではないか。

佐々木会長 行政等との連携については大学から働きかけるケースが多いが、プログラミングの件は町からの要請だったと思う。

事務局 プログラミングの講座に関しては、町の高齢者支援担当からシニア向けの講座としてお願いした。

佐々木会長 大学にも地域連携に関する部署があり、体制自体は整っているがそれほど活発には動いていない。大学、町、民間企業それぞれ単独では限界があると思う。うまくマッチングや連携できる仕組みがあれば良い。

難波委員 宮代町は起業したい若者にとっては家賃も安くて立ち上げやすく、かつ商圈も近いのでメリットは多いと思う。

佐々木会長 ビジネスプランコンテストなど、大学が信用金庫や民間企業と協力して開催するような方法もある。

それでは次に、④のテーマ「まちづくりのために意欲的に活動する市民を生み出していくには？」について何か意見があれば。

折原委員

宮代の将来ということであれば、都会から一番近い田舎を活かすべき。イギリスのコッツウエツズは田舎を観光に活かしている。新しい村で東京の小学生が稲刈りや田植えで楽しんでいるので、そういったものを観光に組み込んでうまくコラボしていけば、結果的に町のブランド力、これぞ宮代につながるのではないかと。江戸川区の防災計画で雨が降ったらとにかく逃げろ、区から出て行けと書いているようだが、避難の受け皿がない。町内の空き家を避難先の受け入れに活用するなどの取り組みができれば、交流にもつながり、新しい切り口になるのではないかと。

佐々木会長

観光に何をくっつけるかが重要である。第4次計画では農を楽しむグリーンツーリズムということで農と観光だったが、それ以外の連携方法は考えられないか。

吉澤委員

もっと徹底的にやった方がいいのではないかと。これまでも農業体験等少しずつやってはいるようだが、「これぞ宮代」と言われるとそこまではなっていない。例えば商業はレトロな感じでいくとするならば、もっと徹底的に取り組むべきではないか。これまでやってきたこともダメなわけではないが、アピールの仕方が問題だと思う。

八木橋委員

情報発信の方法が難しい。それぞれ別々にやっているのではないかと。意欲的に活動する市民を生み出したいのであれば、ボランティアなどどんなメニューがあって何ができるのか、情報を集約して一覧で提示しないと分かりにくいし市民も動けない。例えば今週末の祭りも同日開催なのに別々にポスターを作っていたが、横の連携を強めて情報発信の方法を見直すべきではないか。何を伝えるか、これまでの方法を見直し、ボランティアも観光も、とにかくうまく住民とのきっかけをつくっていくことが重要である。

吉澤委員

興味がある人だけが情報にたどり着くのではなく、興味がない人にも自然に情報が入ってくるような方法を考える必要がある。例えばスーパーでラジオのように町の情報を放送するなど。

高津委員

イベントなどの体験談や口コミがあれば、イベント自体に参加できなかったとしても次は行ってみようかとなるのではないかと。そういった情報がたくさんあれば、住んでみたら楽しそうと思う方も出てくるかもしれない。

佐々木会長

連携が重要なキーワードになると思う。情報発信でもばらばらにやっているものを連携させて無駄なく効率的にやっていくことが大事。第4次計画で別々にやっていたことも連携することで相乗効果や無駄の削減につながるかもしれない。連携やプロセスについて、やりながら考えていってもよいし、それ自体が1つの方針にもなりうるのではないかと。

事務局

実際に誰がやるのかということを考えていかないと、計画も作ったきり

になってしまう。その意味でも④や③のテーマが重要となる。

松山委員

高齢者が元気のある町として成功した町としてアピールしたい。そのためにはまず、元気な高齢者を探す必要があるが、高齢者は携帯を持っていなかったり SNS もやっていないなど、口コミで集めるしかないと思う。または、財政的な余裕があれば職員の方が民生委員と一緒に町を回って、知識や技能を持った高齢者人材をデータベース化して更新していく。町でできなければ人材情報を集める人を期間限定で雇ってもいいのではないか。既にシルバー人材センターはあるが、登録していない人はたくさんいる。多少のお金をもらって子どもの見守り、農業支援、高齢者の送迎などを担ってもらい、住民がニーズに合わせて利用できる仕組みを作る。高齢者と子供の触れ合い、放課後保育の手伝い、子供の教育など、ボランティアでできるところはボランティアでしてもらえれば、高齢者の生きがいになり、活動を通じて健康維持にもつながるのではないか。

鈴木委員

地域住民や高齢者が主体となってコミュニティビジネスをやっていくのが望ましいと思う。ただ、きらりで送迎をやっているが協力者が非常に少なく、ファミリーサポートセンターも依頼は多いが支援する側の協力会員が少ない。もしそういった人材バンクがあれば就労支援、やりがいにもつながると思う。

佐々木会長

女性が活躍するという視点はどうか。昼間地域にいるのは高齢者か子育て中の女性が多いのではないかと思う。

鈴木委員

働きたいが介護のような重労働はできないという女性はたくさんいる。最近はこども食堂が話題だが、大人食堂があってもいいと思う。レストランなどに行けない高齢者が気軽に近所で外食できる場があれば、女性の活躍の場になるのではないか。

保科委員

他の自治体では、社会福祉協議会がお帰りのイベントをやっている事例がある。定年退職した方に集ってもらい、立食パーティ形式で地域のボランティアやコミュニティビジネスの紹介をする。そのイベントをきっかけに定年退職した方が事務局となり、お手伝いビジネスを展開しているようだ。公民館を会場にお茶と菓子程度を用意し、広報でお知らせする程度なのでお金もそれほどかからない。社協がボランティア育成事業の一環で実施すればどうか。

佐々木会長

社協では税金も投入されている。市民が主体となってそういったイベントを開催することもできそうである。

保科委員

ある程度育ってきたら市民のイベントにしてみたらよいと思う。

佐々木会長

宮代町は既に育っているのではないか。

折原委員

人材発掘は既に社協でやっていたと思う。

保科委員

ボランティア入門講座のようなものはよくあるが、それだとボランティアに興味がある人しか集まらない。お帰りのイベントはボランティアに興味のない方も捉えることができる。人材発掘までとはいかないが、そこ



でどういったことに興味を持っているのかという参加者の情報収集はできるのではないかと。

佐々木会長 それはリタイアした方がメインになってくると思うが、起業したい若い世代を対象としたものではどうか。地域に戻ってビジネスを立ち上げたいという若い人も多いように感じる。

八木橋委員 最初のきっかけは行政がやって、あとは若い人が起業しませんかという場を設定して、そこに集まった人が組織を作って進めていく。人材バンクを作っても誰が回していくのか。また、人材バンクがあってもいつ、だれがそれを活用するのか。人材バンクを動かす組織や若い人の起業を推進するような組織を市民自身がつくるように持っていけないといけない。スタートは行政がやるが、人が集まった段階で組織として自立するような流れができるとういのではないかと。

佐々木会長 行政からスタートでなくてもよいのでは。行政がスタートすると、最初はお金があるが、なくなると盛り下がって終わってしまうという話をよく聞く。スタート時点から民間が関わるというアイデアもあるのでは。

八木橋委員 民間による立ち上げのきっかけづくりや場があれば。私自身がアドバイザーとして県に登録しているが、以前は窓口で要望に応じた適切な人材の紹介を行っていたのに、現在ではホームページへの人材データの掲載のみになってしまった。人材の情報や組織があってもそれを上手に活用することは難しい。

高津委員 ベビーマッサージの資格を取得し開業した。宮代町にもアクセサリーづくりやベビーマッサージなど技術を持つ人が点として存在しているが、それがつながっていかないと感じる。やりたい人は勝手にやるので、そうした人同士のつながりができれば拡大していくのではないかと。先日、町に初の放課後等デイサービスができたことを偶然知ったが、春日部や岩槻では障害児向けのサービスが充実している。町に今までなかったため、やってはいけないのかという思い込みがあった。できるのを待つという受け身の姿勢がまだまだあるように思う。

保科委員 仕事していない女性は宮代町に多いのか。今は子育てが一段落したら正社員に戻れなくてもパートタイムで働く人が多く、昔ほど自由な時間がある30~40代の女性は少ないのではないかと。

吉澤委員 保育所も学童保育も一杯なので、働いている女性はたくさんいるのでは。

八木橋委員 笠原小のお迎えにくるお母さんで新しい村はいっぱいになる。

吉澤委員 パートに出ている母親はかなり多いのではないかと。子どもとセットで参加して何か活動ができる場があるとよい。

八木橋委員 子どもを送り出した後に長く立ち話をしている母親もいるので、時間がある方も多いのではないかと。

保科委員 活動がビジネスとして高めの単価の仕事になるかもしれない。学校と連

携して子どもの母親層にアプローチすることで人材を見つけ、システム化できる可能性はある。

八木橋委員 例えば主婦が都合のつく時間だけ開店するお店をやることで、母親同士のコミュニケーションの場になるのではないかと。

保科委員 コミュニティカフェで店番は順番にやる、などもよいのでは。

折原委員 時間のある母親はいるのではないかと。平日の杉戸のゲストは主婦らしき女性でいっぱいになる。

事務局 女性の就業率について、27年度の国勢調査では20～24歳で63.0%、25～29歳で76.4%、30～34歳で67.3%、35～39歳で67.9%となっている。22年度に比べ若干の増加傾向にある。

難波委員 人材バンクをつくってボランティアを活用しようという話があったが、ボランティアに頼ると持続性の問題がある。うちの院生がやっていたプロジェクトで、高齢者に万歩計を配りそれをアプリと連動させて高齢者同士で競わせることでより一生懸命に取り組んでくれたという結果が得られた。単にやりがいがいだけではなく、お金・物・ポイントなりがたまってく仕組みがあるとよいのではないかと。待機児童がゼロでも、子どもを預けることができれば母親も働きたいという潜在的なニーズはあるため、そのニーズを満たすことで東京から1時間半程度の別の自治体では、若い世代の移住が進んでいるケースもある。待機児童ゼロの宮代もそれを前面に押し出すとよいのでは。

吉澤委員 障害者施設を運営する法人が銀行の前で小さなカフェをやっているが、そのカフェは、コミュニティを作ることをコンセプトにしており、町民が自由に使えるカルチャー教室のような場所を提供している。

情報が集まる場を担ってくれる民間を募るだけでなく、探し出していくのが大事だと思う。また、以前に市民活動について町からの声掛けで協議をしたことがあったが、町はお膳立てをよくしてくれるため、1年目はよいが、行政が手を引いたとき、市民力が付いていないということを経験したことがある。最初から民間が入っていくような仕組みや民間がメインになる形になるとよいのではないかと。

### (3) 第5次総合計画の将来都市像について

第5次総合計画の将来都市像について、各委員から提出されたキャッチフレーズについて説明が行われた。

佐々木会長 幸福度というキーワードのある2つの将来都市像、「県民幸福度県一位のまち」「幸福度 No.1 のまち」を選んだ。未来に向けて前向きな今までになかったようなキーワードがほしいということから「田園未来都市みやしろ」田園という古き良きものと未来が結びついているキャッチフレーズ、「皆で作ろうみやしろマーケット」という民間のイメージが入った

ものを選んでみた。

佐々木委員

宮代町に来てから、人が優しく、人付き合いで嫌な思いをしたことがない。そこで「人と人がつながるまち みやしろ」「つながろう人と人 自然が優しく輝くまち みやしろ」を選んだ。また、市民参加型の考えが強くあり、自分がやりたいことを実現できる町だと思っているので「小さくても大きなチャンスのあるまち」を選んでみた。また、「ふるさと宮代町」、誰もが住んでいる所・生まれた所として誇れる町であればよいと思いい選んだ。

八木橋委員

自然に親しんでいるため、選んだものにはすべて「自然」というキーワードが入っている。自然はなくてはならないものだと思うが、自然だけでは生活できないので、「自然」＋「明るい未来」住んでいる人が未来を夢見られるような町、豊かな生活が送れて人々が輝くような町というイメージで選んだ。

保科委員

人間味と居心地を重視したイメージで考えた。「人と人がつながる町 みやしろ」「人が集うみやしろ」「寄り添えるまち みやしろ」「緑あふれるやすらぎのまち」、居心地という点で「住みたくなる町」「丁度良い町」を選んでみた。

松山委員

人材に関連して、皆に関心を持ってもらいたいということで、「新しいまちづくりに関心を持って新しい宮代をつくろう」を一番にあげたい。また、「人も自然もいきいきみやしろ」「住みたくなる町・住み続けたい町」を売りにしたい。一方で、子どもがいないと高齢化してしまうので、「子育てが安心できて安全なまち」もよいと思う。「自然豊かなやすらぎのある町」これが宮代のいいところだと思っている。

高津委員

「人と人がつながる町 みやしろ」「住んでてよかった宮代町」「人が集うみやしろ」など人と人のつながりをテーマとして選んだ。やはり、ご近所さん、高齢者の中にも「こんなことができるんだ」と驚くような人がたくさんいる。そうした人をつなげるためにも町が必要であることを知らせることが必要である。

折原委員

農業をやっているため最初は「自然」をキーワードに「自然豊かなやすらぎのまち」「豊かなコンパクトシティ」「人も自然も生きるみやしろ」を選んだが、過去のテーマを見ると似たり寄ったりで面白くないので、「未来を照らす輝くみやしろ」というテーマが元気になるような感じがして新しい発想だとこうした形がよいと思いい選んだ。

秋山委員

あえて「No. 1」が入っているものを選んだ。自然や緑だと杉戸や幸手などの近隣自治体と変わらない。今回のテーマが未来に向けた将来像ということだったので、外向けに対して何を言えるか。そこであえて数字が入ったものにしてはどうかと考えた。「幸福度 No. 1 のまちみやしろ」など何を指すのかが明確になっているとよいと思う。

難波委員

町に住んでいないので初めて町を訪れたときに「自然」や「緑」の印

象が強かったため、自分で考えるならばそれを入れると思ったが、第4次のテーマである「みどり輝くコンパクトシティ」を見たときに人の要素が入っていないため、ぜひ人の要素を組み込みたいと感じた。また、田舎だけど都市的であるという要素を入れたい。宮代町の魅力は行政の風通しの良さだと思うので、それを拾うため「都会の匂いのするしゃれた田舎」「見晴らしのよいまち」「人も自然もいきいき宮代」の3つを選んでみた。

並木委員            まずは「短くシンプル」という点で選んだ。また、これからの未来像であるので、町を担っていく若者に向けたタイトルということで「いいじゃんみやしろ」や「おもしろみやしろ」など短い言葉で表現した。また、「ほっとする」「パワースポット」にかけて「ほっとみやしろ」など、若い人が興味を示してくれるようなタイトルを選んだ。

鈴木委員            選んだ5つのなかで4つに「輝く」というワードが入っている。その中でも短く分かりやすいものなら覚えてもらい、声にもしてもらいやすいと考え「未来を照らせ 輝けみやしろ」「輝け水と緑のみやしろ」また、「つながろう 人と人、自然が優しく輝くまちで」などを選んだ。

吉澤委員            過去1～4次のテーマを見ると「水」や「緑」が入っているため、入れるべきなのかと思ったが、第5期からは「人と暮らし」など発想を変えてと思い選んだ。「つながろう 人と人、自然が優しく輝くまちで」「生きるを再発見みやしろ」「住めばみやしろ」「都会の匂いのするしゃれた田舎」「日本で一番安らげる場所みやしろ」などを選んだ。

佐々木会長           今日皆さんの意見を受けて、事務局としてはどうか。

栗原課長            全体として、宮代は「人」「つながる」「顔が見える」「距離が近い」ということが特徴的だと思う。一方で「自然」だけではどこでもあるので他の所と何が違うのかということが、「都会の良さもある」「幸福度」なのだと思う。単なる自然だけでは他との差別化が図れないので、皆さんがおっしゃったような「幸福度」「人とのつながりがある」「都会的な香りも含んだ田舎」などがよいと思った。お話の中で「郊外の品のいい田舎」「気軽に挨拶できる隣人がいる」というようなことが、皆さんが描く10年後の未来なのだと感じている。

#### (4) その他

事務局より総合計画のフォーラムについて、次年度の4月19日(日)に開催することの周知が行われた。加えて、町民と町職員ワークショップの結果概要について、事務局より報告が行われた

#### (5) 閉会

以上